



藤田康範 教授

専門:応用経済理論

(インタビュアー:菊井・郭)

『数学を用いて役立つ研究をしたい!!!』

Q. 藤田先生の専門とされている研究内容はなんですか？

応用経済理論です。応用経済理論という言葉にはあまり馴染みがないかもしれませんが、ミクロ経済理論に基づいて経済政策や経営戦略を立案することを専門としています。

長名寛明先生というとても厳格な先生のゼミに所属していました。先輩には中村慎助先生、グレーヴァ香子先生がいます。そのようなゼミでミクロ経済理論を学び、初めて学会で報告した論文は政策金融に関するもので、「利潤最大化を行動原則とする民間金融機関」と「収支相償を行動原則とする政策金融機関」が併存する「混合市場」では「過剰参入定理」が成立しないことを示しました。

その後、アンチ・ダンピング政策についての論文を書いたり、排出権取引とCDM (Clean Development Mechanism) の最適な組み合わせを考えたり、と様々な現実問題について分析しましたが、多くの個別具体的な理論モデルを構築しているうちに「数学を用いて役立つ研究をしたい」「モデル構築の技術をもっと磨きたい」と考えるようになったところ、「それに相応しい学問こそ工学である」とおっしゃってくれた先生がいたので、思い切って工学に進みました。だから僕の最終学歴は東京大学の工学博士で、少し変わっていますよね。

工学系研究科でブラック・ショールズ理論等を学び、現在は、金融工学的手法と伝統的経済理論を融合する研究をしていて、経済物理の英文誌に論文が掲載されたりしています。

『プロジェクト思考でイノベーションを起こす』

Q. 藤田先生の教育理念を教えてください

今の日本って、GDP が伸び悩んでいるとか、格差が広がっているとか、なかなか危ないじゃないですか。これまでの日本企業のビジネスモデルは、極端に言えば「真似をして安くする」という感じだったけど、これからは違う。このような中で、まず良い人生を歩み、その上で、世の中を引っ張っていく大人になってもらいたいと思っています。

つまり、「第二のスティーブ・ジョブズ」のような革新的な人になって欲しいので、知識そのものを教えるよりも、「知識を収集し、分析・編集して発信する方法」を教えることを教育理念とし、しかも、知識として、「形式知」だけでなく、「暗黙知」を重視しています。

高校までは、主として、文字にできる「形式知」を学んでいますよね。そのような勉強も大事だけれど、自転車の乗り方のように、マニュアル化された文字情報だけでは不十分で、やってみてはじめて分かるという「暗黙知」もあります。

また、「呼吸」って言葉がありますが、これは「吐いて吸う」という意味ですよ。だからアウトプットをしなければ、輪読の時に吸収する効率も上がらないと考えています。

さらに、高校までは、日本史とか国語とか、個別の科目 (subject) を学びますが、世の中の問題は、それらを組み合わせで総合的に考えないと解決しにくいですよ。

そこで、ゼミではプロジェクトを通じて、みんなが自立する手助けをしています。

具体的には、企業から課題をいただいて、その課題を解決し、プレゼンテーションさせていただいています。基本的には、「よい財・サービスを作ってそれを普及させるための戦略」の立案です。そういう意味でうちのゼミはコンサルっぽいですね。

何かを提案する時にはその提案が最善である理由も示さなければなりません。が、「最善」な提案をする時に、ミクロ経済理論の最適化手法を応用しています。

「教授」という文字通り「教え授ける」という感じではなく、先輩として必要なことを要領よく教え、その上で共通の目標に向かって走っていきたい、と思っています。放課後や休日に、ファースト・フードやファミリー・レストランでのグループ・ワークに加わることもよくあります。

『勉強と野球と音楽好きのすごく普通の大学生！！』

Q. 藤田先生の学生時代のお話を聞かせてください

すごく普通(笑)。野球と音楽がめちゃめちゃ好きでした。目が悪くなってしまったのでソフトボール大会には出られないけど、バットは研究室においてあるし、素振りはしています(笑)。体育の授業(シーズンスポーツ)で野球を選択したのが楽しい思い出ですし、また、ピアノとベースを弾くので、クラシック音楽サークルの演奏会やバンド・サークルのライブに出してもらったりもしていました。

とても自由な校風の中学・高校に通っていたので、大学に入って今さら遊ぶ気分にもならず、少し曖昧な状態でしたが、勉強がすごく好きだったので、普通に勉強して、成績はよく、金時計をもらいました。

ただ僕の自慢は良い時と悪い時の両方を経験していることです。表彰学生にはなったけど、受験はちゃんと失敗していますしね(笑)。

あとはバイトですね。授業料を自分で払いたいと思っていたので。やっぱり自分で授業料を払うと真面目になりますね。

家庭教師をしていて、小学生や中学生に教えていましたが、優等生に教えるという感じではなく、先方の希望で、キャッチボールをしたり、美術の宿題を一緒にしたり、昼ごはんも夕ごはんも一緒に食べたりとかしていました(笑)。

『実は行き当たりばったりだった進路選択』

Q. 将来の進路についてはどう考えていましたか？

勉強がとても好きだったのでもっと勉強したいなという気持ちはあったけど、うちはごく普通のサラリーマンの家なので、銀行員になろうと思っていました。

銀行なら勉強しながら働けるかなと思っていたのですが、どの銀行でも、すぐに最終面接まであげてくれるけれども、何が好きなのかと尋ねられて「勉強です」と答えると「うちには来ない方がいいよ」って断られました。志望動機が弱かったし、こっちのことを思ってくれたのかなと感謝しています。

そこで大学院に行くことにしたのですが、大学の先生になるのっていろいろと難しそうなので、高校の先生になって、野球部か音楽部の顧問をしつつ、勉強を個人的に続けられれば良いなと何となく思っていました。

すると、幸運なことに出身高校で数学を教えることになり、その後、さらに幸運なことに、開成高校で社会科を教えることになって専任に決まりかけていたのですが、縁があって大学に残ることになりました。

少し美化すれば、スティーブ・ジョブスの connecting the dots のような感じですが、要するに「行き当たりばったり」ですよね。

今だったら一度働いてから大学院に行くのも良いかもしれませんね。これまでは大学院からずっと研究して大学教授になることが多かったようですが、最近はそうでない人も増えていますよね。これから大学も変わってくると思いますし、たとえば、ビジネススクールで教えるのであれば、一度働いてからの方が良いのかもしれないですね。

『あきらめず頑張ろうという意識』

Q 藤田ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

真面目で、自分の意見を述べることや対面のコミュニケーションに抵抗が無いこと——これらを求めている、ゼミの選考ではこれらの点を確認させていただくようにしています。

まず、試験をしますが、テキストと範囲を明確にして、真面目に勉強すれば絶対に大丈夫なようにしています。次に、事前レポート。コラムや名文等、興味を持ってもらえそうな文章をたくさん提示し、その中から1つを選択して感想をまとめてもらっています。そして、5~10分ではあるけれど、面接をしています。

基本的に、明るくて前向きな人がいいかな、と思っています。それと、何かを考える時に、「楽観的シナリオ」と「悲観的シナリオ」を同時に思い浮かべることを習慣にしている人がいいかな、と思っています。物事を決めつけて考える人はあまり向いていないかもしれませんね。

(少人数セミナーに落ちた人は入れないという噂は本当ですか？という質問に対し、)少人数セミナーの選考は、ゼミ選考に比べると、かなり抽選に近いので、たとえ少人数セミナーに落ちたとしても、全く関係ないので、「自分は藤田ゼミに向いていない」と決めつけないで欲しいと思っています。

『毎年毎年一期目という意識』

Q 藤田ゼミの人気の秘訣はなんですか？

人気があるかは分かりませんが、たぶん、毎年一期目のつもりでやっているからだと思います。もう早いものでゼミは15期になるのですが、毎年新人でいるつもりでやっています。良い伝統を引き継ぎながらも、今年が最初という気持ちでやっている——こういうところを良いと感じてもらっているのではないのかな、と思います。

また、僕自身が「山あり谷あり」の人生を送っていて、伸び悩んでいる人の気持ちが分かる唯一の教授だと思っているので、この点にも共感してもらっているのかもしれない、と思っています。

「何か新しいことをしよう」というコンセプトは第1期から変わっていないのですが、毎年、ニーズに合わせて少しずつ変わってきています。

最初の頃はまさに僕の専門である応用経済理論分析によって経済政策の論文を書きたいって人が集まっていたのですが、5期ぐらいから経営戦略をテーマにしたいという人が増えてきました。そして10期ぐらいになると、さらに具体的な戦略の立案、つまり企業の方々から課題をいただいて「感動を設計すること」に興味を持つ人が増えてきて現在に至っています。

このように、こちらのシーズとみんなのニーズをすりあわせ、お互いに楽しんで高めあっていることが評価されているのかなと思っています。

ゼミ自体もイノベティブなものにしたいので、「大学院レベルのことを楽しく身につける」をモットーにしていますが、うちのゼミのコア・コンピタンスは理論分析であるので、「数学が大好き」という人も多いに歓迎しています。

『殻にこもってみて自分とじっくりと向き合うこと』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

まずは、慶應義塾の大学二年生としての生活を満喫していただき、その上で、これまでの人生を振り返って、成功したことと失敗したことをじっくり振り返っていただきたいと思っています。

今の学生って、バイトとかサークルとか、いろいろと忙しそうです。そして大学生って子供から大人に変わる時期じゃないですか。言ってみれば「さなぎ」だと思います。だから、こもることも大事。ラインとかでつながっているのも

いいんですけれど、「立ち止まること」や「変わることを恐れずに、自分と向き合うことも必要かなと考えています。

自分は何なのか、何になりたいのかをじっくり考え、大きな目標と小さな目標をたてて実行していただきたい。そして自分の周りに友達、先輩、後輩、先生などがいること、そして慶應義塾にいることはありがたいことだと実感してほしいなと思っています。

【編集後記】

2014年度教授インタビュー一人目ということで大変緊張していたゼミナール委員であったが、整理整頓された藤田教授の綺麗な研究室で終始楽しくインタビューさせて頂いた。落ち着きながらも我々の拙いインタビューに楽しく付き合ってくれたその一連の立ち居振る舞いはどれをとっても人格者という言葉がまさに適切。他学部生も含め毎年多くの学生が志望する藤田康範研究会、その理由が伺えた様な気がする。

この度は教授インタビューにご協力頂き、誠にありがとうございました。

委員長 菊井毅